

# 旅を考へる

——九州旅行から——

菅 原 教 造

## 旅の共同社會

旅の動きは心の動きで、それは一つのものです。九州の旅は、一つ心の旅でした。眼に見える形から言へば、四十三の個體人でせうけれども、實は私達は、旅と言ふ見聞の世界に生きる一如の「體驗の共同社會」を作つてゐたのです。體驗の共同社會だけではありません、同時に又、分け隔てのない「家族の共同社會」を作つてゐたのです。私達の何時の何處の生活を考へて見ても、仲の良い親子の間柄でした。私は、「おーい、子供達！」と、何遍呼びかけた事でせう。その子供達は、「おやち様」「おふくろ様」と、口に出しては呼びませんでしたけれども、さう思つてゐたに違ひありません。互の氣持で、一つ心で、よくそれがわかるのです。

私達は、福岡・長崎・鹿兒島・宮崎・岡山で、櫻蔭會と言ふ「同學の共同社會」の友情と好意に包まれて、今更のやうに、六十年の傳統を持つ七千人の生活團體の偉大さに驚嘆しました。これも、旅でなければ得られない強い感激です。各地で、私達は何もして差上げないで、たゞ過分のものを受けてばかりゐると言ふ氣持でいつぱいでした。これは、一方、母校が櫻蔭會支部員の方々を通して私達に澁い下さる恩恵に對する感謝の氣持であり、そして他方、この感謝を、私達は直接に切實に、支部員の方々に捧げてゐるのです。

あゝもしたい、かうもしたいとお思ひになる事が多すぎて、何を省くかについて苦心してゐられる事が、よく私達にわかりました。又私達は、雨がはれるやうにミ、心から祈つて下さるお姿を見ました。又長い旅に勞れてゐるはしないかと言ふ同情から、なさりたい事を控え目にして、心の中でいろ／＼思ひやりをして下さる……このお現はしになれない御好意を、私達はしみ／＼ありがたひと思ひました。このやうに互に往復し循環してゐる氣持のまゝまりが、旅に於て體驗される同學の共同社會の生活感と言ふものでせう。

このやうに、私達は今度の九州旅行で、移り變つて行く旅のいろ／＼の生活場面に沿うて、一つ、心を味つて來たのです。別の言葉で言ひ換へれば、その場その時の旅の體驗的、共同社會に即して、それよりもつミ内的な、旅の家族的、共同社會や、旅の同學的、共同社會の生活をして來たのです。

若い人達によく永遠の友情<sup>イデア</sup>と言ふ事を考へるでせう。それは、理念の世界に住む、言はゞ真空の中に住む純粹思想<sup>イデア</sup>です。この純粹思想としての永遠の友情を、真空から空氣の中へ導き、生活の中に宿らせようとする所に、やはり私達人間のブレ・ダンの氣持が動くのでせう。

今、思惟ミ人ミの關係を考へて見ませう。思惟の方を不動のものミ考へれば、人は動いて思惟に觸れたり遠ざかつたりします。人の方を動かさずにおけば、思惟は動いて人に即いたり離れたりします。人も思惟も共に動くものミすれば、その兩方の通りすがりに起つた重大なモメント、千載一遇ミ言ふやうな觸れ方が、兩方の間に起るでせう。

人ミ思惟ミが共に動くやうに、旅では旅人も動き旅の對象も變ります。その互の通りすがりの間に、一生に一度ミ言ふやうな、たゞへば、結晶した寶玉のやうな觸れ合ひ方があるでせう。それが永遠の友情の閃きの一つの例です。

## 觀光記錄

今度の九州旅行では、耶馬溪を阿蘇を省きましたが、それでも、博多灣の風光、長崎の唐八景、雲仙・霧島・瀬戸内海の國立公園の景觀、鹿児島史跡の景勝、青島の熱國の潮濕植物、別府の溫泉郷、かうして思ひ出して見る、浮み上つて来る一々の風景場面が多過ぎて、それが入り亂れたり重なり合つたり、流れたり消えたりするものですから、記録は容易な事ではありません。

觀光の記録にも、代用記録と補充記録とがあります。代用記録は物語りのやうなものであり、補充記録はトーカーの言葉の部分のやうなものです。旅人が旅の印象を話し又は書き、それを、その體驗をしなかつた人が聞き又は讀む場合が代用記録です。旅人が、自分の旅の體驗そのものゝ代りに、體驗の記録を人に示すことを考へてもよし、讀者又は聞き手が、自分で體驗をする代りに、旅人の記録に接することを考へてもいゝでせう。次に、觀光案内人が、名勝や舊跡を旅人に解説して聽かせるのが、補充記録です。案内人も旅人も共同の體驗をしてゐるのですが、「この森は……、あの海は……」、と言ふ案内人の解説が、旅人の直接の印象を補充して、それを深めるわけです。

バス・ガールの説明は、この補充記録です。これは、出来栄えはともかくもとして、筋から言へば、現場報告の觀光記録の文學とも見る事が出来、又ラヂオ文化になじみのある現代女性の話し方の一つの例と見る事も出来ますから、次に各地で集めたレコードのテキストを再録します。文學としての又は話し方としての價值の問題は置いて、私達旅の體驗者は、少くとも、これによつて思ひ出を鮮かにする事が出来るでせう。前に話し方の様式を述べたやうに、バス・ガールの觀光説明は、七五調の文語で話す加留多讀み調、口語で話す講演調に分れて居ります。つまり舊派と新派です。次に再録した觀光記録は、テキストの句點を改訂して、話す人の息の継ぎ目の所に打つてあります。

A 加留多讀み調

Ⅰ『大阿蘇登山案内』 大河蘇登山バス

バス・ガール 東 み さ な 玉 木 末 香

(上) おらが<sup>おほ</sup>大阿蘇、男の胸よ、

さんさくくく、大地ゆるがす<sup>ち</sup>地の底までも、

やんれ、<sup>おほ</sup>大阿蘇、男の胸よ。

お待ち遠さま、これから阿蘇登山でございます、御案内いたします。

こゝは世界に第一さ、呼ばるゝ火山<sup>だい</sup>大阿蘇の、火口丘への登山口、海拔一千七百餘尺、坊中驛<sup>やき</sup>に申します。

こゝの裾野の森林を、くぐりつゝ約一哩、ドライブすればこのバスは、眼界廣き山腹の、草野<sup>くさの</sup>の原に登ります。

斜左の空高く、鋸<sup>のこ</sup>の齒に似た根子岳<sup>ねこだけ</sup>は、五岳の一つに數へられ、高さ四千七百餘尺、右は高岳<sup>たかだけ</sup>の鷲ヶ峰、形いづれも嚴

めしく、奇しき眺めでございます。

斜右手の目平らに、頂きの見ゆるあの山は、名も米塚<sup>こめづか</sup>に呼びなして、寄生火山に數へられ、下り道にて見下ろせば、山の形の整ひて、いさ美しく愛らしく、その傍らに牛馬の、つぎひ遊べる有様は、平和な眺めでございます。

向うかなたに聳ゆるは、今日御登山の目的地、阿蘇の五岳の一つなる、その中岳<sup>なかだけ</sup>の噴火口、火口のまわり約一里、中には火口が又七つ、外輪山<sup>ぐわいりん</sup>に火口原、共にそれぐ備はりて、この名山<sup>だい</sup>大阿蘇の、複成火山<sup>ふせう</sup>に言ふこみが、いさ明らかに知られます。

次は山上の終點でございます。これから噴火口へは約十町でございます。御ゆつくり御覽遊ばしませ。

(下)お勞れさま、これから下山致します。

こゝは海拔三千ミ、八百餘尺大阿蘇の、西一帯を見渡すに、眺望第一の所にて、昭和六年秋深き、十一月に畏くも、今上陛下の御觀賞、あらせ給ひし御野立所、その御跡でございます。

遙かに遠く西の方、霞の中に聳ゆるは、雲仙ヶ岳その左、雲か山かゝ續けるは、殉教戦に知られたる、風光絶佳繪の如き、げに水天髣髴の、天草島でございます。

北外輪きたぐわいりんの右の方、久住山くじゆさんの東遙かなる、名だゝる別府溫泉も、この阿蘇山の火の脈に、續いてゐる言ふならば、蘆花先生の殘されし、

肥後三豐後は、兄弟仲よ、

脈が通へば、血も通ふ。

阿蘇の煙に、別府のいで湯、

燃ゆる生命の、火は一つ。

唄の心はいわれある、地理關係を面白く、説かれしものでございます。

この偉大なる阿蘇は又、國立公園の一つにて、我が九州を横切れる、國際遊覽幹線に、中樞たるの位置を占め、西に雲仙東に別府、中に火を吐く阿蘇の山、九州景勝地帯中、王者じやの觀あり言はれます。

今火口原の坊中に、おりて登山はすみました、つきぬ名残を惜みつゝ、謹んで皆様の、御健康を祝します。

終點坊中驛でございます。お勞れさまでございました。

②『別府温泉地獄巡り』 龜の井遊覽バス

バス・ガール 森山富美子 唄 小濱登代子

(一) お待遠さまこれから龜の井バスの地獄巡りでございます。

「こゝは名高い流れ川、<sup>かは</sup>情もあつい湯の町の、メインストリートの大通り、旅館商店軒ならび、夜は不夜城でございます。

四季の氣候は快き、心つくしの九州に、山と海との眺めよく、いで湯溢るゝ別府市は、戸數一萬人口の、五萬餘人を數へられ、東西より南より、北より來る内外の、客はひきこせ百餘萬、外つ國までも知られたる、温泉都市でございます。

龜の井前でございます。小唄をうたひます。

地獄巡りは、龜の井バスよ

乗ればにつこり、ささ乙女の手掌、

名所解説、節面白う、

唄ふ車内の、ささいさいなごやかさ。

正面高く仰ぎ見る、乙原山<sup>をいんざん</sup>の高臺に、ケーブルカーを走らせば、中國四國の涯てまでも、遙か一き目に見られ又、山の上には乃木神社、高野寺などがございます。

次の各所は鶴見園、園の中には温泉も、歌劇もあれば九州の、寶塚も申します。

次は觀海寺、又その次は八幡の、地獄地帯でございます。

八幡でございます、御見物遊ばしませ。

(二)發車致します。

この一帯は古戰場、慶長五年の秋九月、南軍大友義統は、黒田如水の北軍と、五日に互りて激戦し、武運つたなく南軍の、主將吉弘統幸が「あすはたが、草の屍や照らすらん、石垣原のけふの月影」を、辭世の歌を詠み捨て、あたら陣頭の露も消え、忠烈の名を後の世に、残せし所でございます。

この天恵豊かなる、温泉地帯の中央に、左の空を見あげれば、火を吐きやめし鶴見嶽、右の彼方を見おろせば、霞たなびく豊後灘、この一帯を彩れる、いで湯の原と山と海、百景萬勝たてよこに、錦織りなす景觀は、神の繪筆に描かれし、生きた名畫と申します。

小唄をうたひます。

鶴見八幡、石垣原、

行く手樂しき、ささ遊覽コース、

動く野山の、景色に見られ、

バスの小揺れの、ここさいさい乗り心地。

次の名所は海地獄、縁滴る絶壁を、背景させる谷間に、深く湛えし熱湯は、色紺碧の海に似て、そのもの凄さ美しさ、嘗て今上陛下には、まだ東宮に在す時、そこに台臨遊ばせし、別府名所でございます。

海地獄でございます、御見物遊ばしませ。

(三)發車致します。遙か向うに美しく、ちようご湖水のそれに似て、鏡あざむくあの海は、新渡戸博士もナポリなぞ、

遠く及ばぬ絶景ミ、感嘆されし別府灣、その全貌でございます。

すぐこの下の湯の里は、昔一遍上人が、熱の湯蒸し湯を築き又、時宗の一派を開かれし、名高い鐵輪溫泉場、今十萬の浴客を、迎へ送るご申します。

小唄をうたひます。

お湯の鐵輪かんなわ、朝日に映えて、

踊る湯煙、ささ渦巻くいで湯、

海の見晴らし、見あかぬ山に、

色はコバルト、ミこさいさい海地獄。

このトンネルを過ぎ行けば、別府八景柴石の、いご閑靜な溫泉場、昔朱雀天皇の、太子親仁親王が、そこに御湯治遊ばせし、尊き遺跡ご申します。

次の地獄の血の池は、赤く湛えし大地獄、血の湧くやうな熱泥の、そのもの凄しい紅は、海の地獄の紺碧ミ、思ひ合せて不可思議な、コントラストでございます。

行く手に見ゆる市街地は、人口五千戸數千、海に面して山を負ひ、景色もいさゝ麗しく、溫泉地帯の北端に、いで湯豊かな龜川の、溫泉場でございます。

龜川でございます。

(四)これから別府へ直行いたします。

これより南へ南へミ、見ゆる景色は走馬燈、右に山々左海、坦々たる道五キロ餘の、速見が浦をなつかしい、別府へド



ライブ致します。

左の灣の右の方、遙に續く山脈の、東の涯は佐賀の關、關の東の沖遠く、霞のヴェール被れるは、乙姫ならぬ愛媛縣、浦島太郎の龍宮を、偲ぶ眺めを申します。

小唄をうたひます。

燃ゆる情の、胸の火よりも、

赤い血の池、ささ煮え立つ釜戸、

巡り／＼て、速見が浦に、

關の煙を、ここさいさい見て歸る。

斜右手は大佛像、あの煙突の右の方、林の中にまる／＼と、圓い頭を現はすは、奈良の大佛より高く、高さは二十四メートル、その前方の煙突を、大佛像に供へたる、さても大きな線香を、見るは如何でございます。

左濱邊の浴場は、海の底からいで湯湧き、砂にうもりて浴みする、誠に天下一品の、天然砂湯でございます。

次は海岸流れ川、つきぬ名残を惜まれて、地獄巡りはすみました、龜の井バスは謹んで、皆様の御健康を祝します。終點でございます、お疲れさまお忘れ物のないやうに。

## B 講演調

(一)皆様、お待たせ致しました。今から雲仙登山でございます。出発致します。

皆様、只今登つて居ります坂道が、雲仙の西登山口でございます。これより山腹を縫うて雲仙温泉まで、三里二十二丁、自動車で約四十分の行程となつて居ります。この道路は、今から四十年前以前、雲仙に登山する外國人のために開かれた、國際觀光道路でございます。他の温泉場も、風物も、情緒もすっかり異なる、雲仙國立公園のアウトラインを、簡單に御説明申し上げます。暫らくの間皆様は、右側の、美しい眺望を心ゆくまで味ひながらお聞き下さいませ。

ちようご今から、百四十年前、寛政四年の正月十八日、普賢岳から一筋の火焰が揚り、日夜鳴動し二月下旬には、島原の背面にある眉山から、普賢岳の十倍の高さであらうかと思はれる火焰が天に沖し、三月一日には全山鳴動して、島原半島の大地震となり、それから一月あまり、日夜震動を續け、四月一日、萬雷の一時に爆裂したやうな大音響と共に、眉山は二つに分れ、山汐を冲天高く噴き出し、前面の海上に落下し、忽ち數十の島を造り、對岸の、天草沿岸には大海嘯を起して、天草領、島原領、肥後領を合せ、六萬餘人の死者を出し、家屋、土地、其他財寶の被害殆んど測り知れず、當時の慘狀、名狀すべからざるものでございました。今日人々が嘆賞する、島原九十九島の景勝は、實にこの當時のもの凄い記念物でございます。

こうした歴史を持つ雲仙岳は、日本に、支那との間に貿易が開かれるや、長崎に入港する唐人船の目標となり、日本山を唱へられ、先づ國際的な存在を示すに至りました。

お慰みに、小唄を一つうたはして頂きます。

普賢妙見、國見を越えて、

優し絹笠、來れば手招く、

紅つゝじ。(村田吉邦詩、近藤十九二曲、雲仙新小唄)

(二)皆様、雲仙岳が他の山に優つてゐる所は、高山としてあらゆる要素を備へ、大なる展望、變化に富んだ山岳美を有する點に、その價值がございます。

山頂に平地あり、池あり、瀧あり、内外人の宿泊に適する多數のホテル、旅館を備へ、ゴルフ場、娛樂場の設備を持つ、雲仙温泉がございます。春は雲仙の裾野、約六萬坪のゴルフ場から山頂にかけて、若々しい緑が山容を彩り、海拔四千四百八十七尺の普賢岳は、西九州一帯の連山、天草の群島を指呼の間に眺め、有明海あかみの海波を見下ろして旅の疲れを忘れさせます。馬に乗つて登山するのも面白く、昔風の駕籠に揺られて山頂を極めるのも、旅の一興だに存じます。

初夏はこの山特有の山躑躅が、裾野から峠に、途中到る所に紅の美しいお花畑を見せ、小鳥は縦横に空を飛び交うて、晴れた空に、囀つてゐます。山躑躅は、仁田峠、野岳のだけあたりに一番多く、五月初旬から、六月中旬までが見頃で、全山燃ゆるばかりでございます。

夏は避暑に適し、空氣は清涼、樹木は鬱々として繁茂し、實に黃鹿を避けた樂天地として、二十餘ヶ國の異國人ひがが來遊されます。

秋は紅葉の名所として日本一と稱せられ、全山を包む紅葉の壯觀は、雄大なる眺望に拍車をかけ、平山蘆江先生のお作りになつた唄にも、「雲仙よかばい地獄の中に、普賢紅葉の錦籠」唄はれて居ります。紅葉見物には、十月の下旬がよろしうございます。

冬は他國に類のない霧氷見物に、遠く諸外國からまで見られます。霧氷に申しますのは、落葉した全山の樹木が、寒

氣のために氷結してゐる所に、さんくミ降り注ぐ太陽に、この世ながらの水晶宮を現出することで、二月三月が見頃だ  
とされて居ります。

又雲仙公園は、非常に高山植物の種類に富む處で、天然記念物として政府の指定をうけた處で、五ヶ所あまりもござい  
ます。かやうに、四季さりふくの異なる景色を有する高山は、世界中にその比を見ずきは、この地に遊ばれた内外人が、異  
口同音に申されて居ります。

(三)皆様、雲仙岳は、普賢、妙見、國見野岳<sup>のだけ</sup>などの諸峰からなり、普賢は雲仙岳を代表する名山で、高さ四千四百八十  
七尺ございます。そして温泉地帯には、學術上貴重なる泥火山<sup>でいぐわさん</sup>を始め、瓦斯を噴き出す噴氣孔あり、無限、叫喚<sup>けうかん</sup>、お糸浦  
七地獄など、三十餘ヶ所の多數に及び、日夜轟々ミ地響をして濛々ミ白煙をあげ、噂に聞く焦熱地獄を目のあたりに見る  
やうで、肌寒さを覺えます。

皆様、切支丹が邪宗ミして、厳しい禁制を受けてゐた、徳川三代將軍家光の頃、役人はいろくの手段を用ゐて、切支  
丹を佛教に轉向させようミ致しましたが、しかし鐵の如き信仰心を有し、十字架の慈愛を絶対に信じてゐる彼等は、如何  
なる刑罰を加へられやうミも、その意思を枉げませんでしたので、役人達は數多くの切支丹宗徒の男女を雲仙地獄に送り、  
彼等を悉く荒繩を以て手足を縛り、白烟あげて沸騰してゐる傍に押し倒し、熱湯を浴せて苦めました。が、轉宗する者は數  
少く、我慢強い信者は、肉も骨も焼け爛れ、息も絶え絶えになり、役人から地獄の谷底に投げ込まれ、無限の恨を雲仙  
に残したミ言ひ傳へられます。

皆様、右手の白い杭は、雲仙國立公園西入口の境界杭でございます。皆様の左手、山の中腹に、鏡の如く光つて見えま  
すのは、諏訪の池ミ申しまして、島原半島最大の湖でございます。湖面はあたかも鏡の如く靜かに、年中深く水を湛え、

鯉や鮒を養殖して居ります。向うの方に帶の如く海上に浮んでゐます島は、天草の富岡でございまして、その海は天草灘と申します。

皆様、正面左手に出張つて居りますのは、籠立場展望所かごたてばでございます。昔、舊藩主がお通りになる折に、必ず駕籠をこめて御休憩遊ばされたので、この名稱が生れたと言はれて居ります。

御覽の通り、後ろには峨々たる峻嶺を負ひ、前には千々石海ちぢりわかいの青砂を眺め、また不知火で知られた有明海あかりの雄大さを眺め得る、誠に小濱雲仙間の道中、第一の景勝地でございます。

(四) 皆様、向うに見えますあの高い山は高岩山ぎんと申します。南は島原、天草諸島を見下ろす、極めて雄大な景勝を持つ、明るく朗らかな感じのする山でございます。昔から切支丹教徒が密かに、祈りの場所としてゐたと言はれて居ります。あの山の左下が、有名な實原ほうげんの躑躅の名所であります。

皆様、左に見えます廣い原は、もこ瀬戸石原いしはらと申してゐましたが、元祿の頃から明治初年まで、躑躅の枝取り禁止、その他の制札場ぎやうばになりましたので、札の原と呼ぶやうになりました。

今から三百年ほご前、雲仙に満明寺みんめいがある頃までは、雲仙一千坊と言はれ、北側の別所と申す所に七百坊の僧坊があり、こゝに三百坊がございました。當時は、女人禁制にんよ、高野山ぎん以上の權威と繁榮を謳はれてゐましたが、寛永十五年島原の亂に僧坊は全滅し、それからすつと放任されてゐましたが、只今では百五十町歩ぶあまりの面積に、アメリカ式天然放牧を行ひ、數百頭の緬羊を飼育してございます。

すぐ右手の別れ道は、小地獄に向つて居ります。小地獄は、享保十六年の創始にかゝる、雲仙でも一番古い温泉場おんせんばでございします。

いよく雲仙溫泉場に近づいて参りました。今暫くで、皆様にお別れ致さなければならぬかと思ひます。甚だお名残り惜しく存じます。お別れのしるしに、小唄を一つ唄はして頂きます。

月の有明、思ひに曇りや、

沖は不知火、九十九島に、

火が燃える。(村田吉邦詩、近藤十九二曲、雲仙新小唄)

皆様、こゝより天下の名勝地雲仙溫泉場でございます。雲仙國立公園中心地でございます。御滞在時間に御餘裕のあらせられます方は、地獄巡りの外、さうぞ天下の名勝雲仙岳に御登山なされますやうお願いして、今日の御案内を終らせて頂きます。お疲れさまでございました。ありがたう存じます。

#### ④『鹿兒島市遊覽案内』 鹿兒島・市營バス

バス・ガール 中村 松江

(一)私達は鹿兒島市營の遊覽バスでございます。ようこそ鹿兒島へお出で下さいました。これから御案内申し上げます。

皆様、こちらは島津氏第二十八代の英主、島津齊彬公なりあきらをお祀り申す、別格官幣社照國神社しやでございます。齊彬公は、徳川幕末の世、内外多事多端の時代に封をお繼ぎになり、島津氏七百年來、第一の明君と仰がれる方でございます。

嘉永六年六月三日、アメリカの水師提督、ペリーが浦賀に参りまして、通商を請ひました際、國論大いに沸騰致しました。こゝは、皆様既に御承知のこゝに存じます。幕府は處置に窮して、諸侯の意見を求めたのでございましたが、中にも、

公の御建言は、極めて重きをなしたと承つて居ります。

齊彬公は、早くから開國進取の論を唱へられ、或は洋書機械類を西洋に求めて、あちらの文物制度を御研究になり、兵制を改めて、泰西の新式をこられ、和漢の方法を参照なさいまして、製鐵業を起され、大砲を鑄造なさいましたり、寫眞術、電信機、瓦斯燈の實驗、紅硝子などの製造を致され、又、木綿紡績の有利なことに着眼せられて、機械り器械を輸入され、帆木綿其他の製造を盛んになさいまして、大いに民業を御奨励になりました。これが、日本に於ける、洋式紡績業の端緒であるに申されて居ります。更に、齊彬公は、大義名分を明らかになさいまして、尊王の大方針を樹てられ、士風を練り、藩學を奨め、人材を養成され、殊に、國旗制定に對する御功績など、近世諸侯中、その識見一世に卓越された英主でございましたが、惜しいかな、齡五十にして薨ぜられたのでございます。

畏きあたりに於かせられましたは、明治三十四年五月二十六日、特に正一位を御追贈あらせられ、この日、鹿児島縣知事を策命使として、公の墓前に御差遣になりました。かくの如く、無上の光榮に浴されましたのは、誠に公の御忠誠、御在世中の、かずくの御偉績は申すまでもなく、實に國家の大計を遺訓され、聖業を翼賛し奉らしめました御勳功に由るのでございます。

(二)これから、明治十年の役最後の激戦地岩崎谷へ御案内致しませう。

こゝが、西郷南洲先生が、明治十年西南役の際暫し御起居なさいました洞窟でございます。この小さな洞窟が、明治維新の大業に輝かしい勳功を樹てられました、大偉人の最後の御居所かと思へます。英雄の末路、誠にいたわしく存ぜられます。

明治十年九月二十四日の曉、官軍の總攻撃が始まりました。先生は、かねての御覺悟の通り、部下の諸將士と共に、こ

の洞窟をあきになれ、こゝ岩崎谷の細道を下られたのでございます。官軍の總攻撃城山の草木を震はし、彈丸雨霰を飛び散るなかで、先生は遂に流れ弾にお倒れになりましたが、負傷に屈せず、天子様のまします、東のみ空を御遙拜になり、やがて、「晋さんく、こゝでよか」、ミ申されましたので、傍の別府晋介氏は、「先生、お許し下さい」ミ、涙を拂つて介錯致されました。

かうして、明治十年九月二十四日の曉、城山おろしの秋風と共に、いたましい御最期を遂げられ、英魂再び還る日はなかつたのでございます。時に、御年五十一でございました。桐野、村田の諸將をはじめとし、其他の勇士の方々も、悉く勇ましい最期を遂げられました。誠にこの地を訪れますミ、薩摩琵琶『城山』の一節

『昨日までは陸軍大將ミ仰がれて、君の寵遇世の覺え、たぐひなかりし、英雄も、今日は敢へなく岩崎の、山下露ミ消え果て、遷れば變る世の中の、無情を深く感じつゝ……』、歌の心も偲ばれまして感慨ひミしを深いものがございます。ではこれから、英雄偉人輩出の地加治屋町の方へ御案内致しませう。

(三)右手は鹿兒島縣立病院でございます、明治六年陸軍大將參議、西郷隆盛先生は、征韓の論容れられず、辭表を提出致されまして、鹿兒島へお歸りになり、故山に悠々自適の生活をおくられ、薩南子弟教育のため、私學校をおたてになりましたが、こゝがその私學校の趾でございます。石堀には、今なほ、明治十年、西南の役當時の彈丸の痕が、鮮やかに残り激戦のものの凄さを物語つて居ります。皆様、石垣をよく御覽下さいませ。

加治屋町に参りました。こちらが、西郷南洲先生の誕生地でございます。このほか常町には、維新の元勳大久保甲東先生や、日露戦役、陸の總司令官大山元帥、海の司令長官東郷元帥、それに黒木大將、そのほか名士の方々の誕生地、或は居宅あきがございます、英雄偉人搖籃の聖地として、不朽の誇りに輝いて居ります。



ではこれから、風光明媚山紫水明の地磯濱へ御案内致しませう。

・右手、紺碧の錦江灣に、色鮮かなる櫻島は、海拔一千百十八メートル、朝夕色彩の妙を示して、鹿兒島の景觀に變化の趣を添え、鹿兒島山水の生命として有名であるばかりでなく、又大正三年の大爆發や、櫻島大根、枇杷なきの産地として有名でございます。

この湖のやうな錦江灣は、文久三年、薩英戦争の際、忠勇義氣に燃ゆる薩摩武士の奮闘に、英國の軍艦は、錨を切つて敗走致しました激戦のあとでございます。しかし、のちほご薩摩と英國の間は、この戦争を楔として、大變仲よくなり、薩摩から留學生を送り、日本文化の開発、國運の進展に多大の貢獻をするこゝになつたのでございます。

(四) 錦江灣を隔て、彼方に遠く連りますは、紀元節に唱はれます、「雲に聳ゆる高千穂の、高嶺おろしに草も木も、なびきふしけむ大御代を、仰ぐ今日こそ樂しけれ」、その天祖御建國の靈地、天孫御降臨の靈峰、高千穂の峰も、韓國岳を併せ有する、國立公園の霧島山でございます。

この磯濱から、海上約一キロ位東北の方が、拔山蓋世の英雄、西郷南洲先生も、勤王の僧月照上人が、幕府の追及に堪へず、安政五年十一月十六日、寒月冴え渡る夜、遂に相抱いて入水されました、三船沖に當ります。

曇りなき心の月の薩摩潟、おきの波間にやがて入りぬる。

大君のためには何か惜しからむ、薩摩の瀬戸に身は沈むこも。

月照上人のお残しなされました辭世でございます。この國道に沿うた、海岸の花倉に申す所に、南洲先生も月照上人を救ひ上げ、介抱致しました漁師の家が、今なほ昔のまゝ残されて居ります。幸南洲先生は、その家で蘇生致されましたが、月照上人は既においたはしい御最期でございました。

御覽の通りの美しい眺め、ザボンの實のなる南の國は、空も、水も、野も山も、全く一幅の錦繪、清く澄み渡る緑の色も鮮かで、ひもしほ名高うございます。この麗しの海濱をドライブしながら、鹿児島の民謡でも一つ二つ御紹介さして戴きませう。

花は霧島煙草は國分

燃えて上るは<sup>あが</sup>おはらは櫻島。

皆様、もう暫らくでお別れでございます。當地の名所舊蹟は、つたない私では、皆様の御満足遊ばすやうには御紹介致しかねました。このほか、まだく珍らしいお話、勇ましい物語が、當市の隨所に秘められて、史ミ景の國鹿児島は、觀光都市として、誠に興味深いものが澤山ございます。お別れに臨み、謹んで、皆様の御健康をお祈り致しまして盡きぬお別れを申し上げます。お疲れでございました。ありがとうございました。

⑤『宮崎名所遊覧案内』 宮崎バス株式會社

バス・ガール 松岡八重子 河野久子 小川内久子

(一)大變お待たせ致しました。では唯今から御案内申し上げます。不來者でございますが、ごうぞよろしくお願いいたします。

宮崎市は、最も古い町で、又最も新しい町だよく申します。我が日本の、そもくの始まりでございますから、これより古い町はない譯でございまして、いろく古跡がございます。

ちようぎ、市の真中を流れてゐる川が、大淀川でございますが、その大淀川の川下は、神代の物語や、お祓ひの祝詞<sup>のりこ</sup>で

有名な、筑紫の日向の、小戸の橘の阿波岐ヶ原でございます。この阿波岐ヶ原に申しますのは、伊弉諾尊が、黄泉の國からお歸りになつて、禊祓を遊ばした處でございます。又天照大神や、月讀命、須佐之男命がたのお生れになりました靈地でございます。

又、これから參拜致します宮崎神宮は、神武天皇御宮居のあきでございます。この宮崎市の一帶は、一木一草、悉くに、ゆかしい神代の香りが漂つてゐるに申してもよろしい程に、由緒ある尊い土地柄がございます。しかし神武天皇御東征の後には、年と共に中央から離れることになりまして、遂には日向の山國まで言はれる程になつてしまつたのでございますが、最近になりまして、再び非常に進歩致しまして、市内到る所新興の氣に充ち溢れて居ります。さうぞ皆様には、古い宮崎を御覽下さいますと同時に、新しい宮崎、いやこれから發展しようとする宮崎をも、併せて御覽下さいますやうお願ひ致します。

この川が、大淀川でございます。只今私共の通つて居りますこの橋は、橘橋に申します。右手の橋は、本町橋に申します。本町橋と、橘橋の間は、旅館町で、川に臨んだ部屋の眺めは、よく皆様から、天下一品だに賞めを戴いて居ります。橋を渡りまして、この通りは、橘通りと申します。橘通りは、一丁目から六丁目までございまして、市内第一の目貫でございます。

(二)皆様、いよく宮崎神宮でございます。では御一緒に御參拜致しませう。このお社は、宮幣大社、宮崎神宮に申し上げます。神皇第一代神武天皇を御祭神に致しまして、東の相殿には、御父君鵜茅草葺不合尊、西の相殿には、御母君玉依比賣の命をお祀りしてございます。

神武天皇は、鵜茅草葺不合尊の、第四番目の皇子でございまして、天照大神から申せば、五代目の御孫に當らせられま

す。御幼名は、狭野の命、後の御名は、神倭盤余彥命と申し上げます。御生れつき、誠に御英明に渡らせられ、御年十五にして、皇太子の御位に御即き遊ばされまして、この宮崎の宮で、天下の政を御執り遊ばしたのでございます。御年四十五に在らせられました時に、皇兄群臣と、東征の軍議を御諮りになりまして、紀元前七年、この宮崎の地を御出發になりましたが、それから、ちやうど七十年の間、申すも恐れ多い事でございますが、天皇には幾多の艱難と御戦ひ遊ばされ、遂に、凡ての荒ぶる惡者共を御平定になり、御年五十二歳にして、始めて、大和國橿原の宮に、第一代の天皇の御位に御即き遊ばしますのでございます。

建國、こゝに二千五百九十五年、皇統連綿萬邦に比類なき我が日本帝國の礎は、實にこの神武天皇御創業の御稜威によつて定まるのでございます。誠に、吾々國民の、齊しく仰ぎ尊むべき所でございます。宮崎市民が、この御社を尊敬致しますことは、申すまでもない事でございますが、事、苟も皇室に關します場合は、又は、國家の一大事に際會致しますれば、市民は直ちにこの神前に馳き來りまして、徹宵神前に額いて、皇運の無窮と國運の隆盛を御祈願致しますのでございます。其他、何事によりませず、先づ、神宮にお詣りしてからと申しますが、市民一般の慣はしみなつて居ります。

(三)この坂を戰場坂と申します。坂を越ゆれば、もう市外でございまして、生目村でございまして、これから參拜致します生目神社は、左手向うの、山の中でございます。少し先きから左に曲つて參ります。

生目神社は、生目八幡と申しまして、譽田別の命と、惡七兵衛景清をお祀りしてございます。景清は平家の武士で、名高い勇士でございましたが、壇の浦の戦で、平氏が亡んでしまつた後、生き残つて、源賴朝をつけねらうのでございますが、遂に捕へられ、盲人になつて、この日向の國へ下向して參るのでございます。

景清が、如何に強かつたかミ申す事は、有名な屋島の戦、景清鏖引きの話でよくわかります。那須の與市の扇の的で、すつかり平氏の荒膽を挫いた源氏方は、何か又、平氏方を苦しめる方法はないかと言ふわけで、有名な源氏の勇士、三保の谷四郎を出して、平家方に一騎打の戦を挑ませます。その時平家方から出たのがこの景清で、兩軍環視の中での、華々しい一騎打でございますが、景清の力や勝りけん、三保の谷四郎逃げかけます。それを、逃ぐるは卑怯ミ、後から兜の鏖を掴みます。逃げようミする逃がすまいミする、力餘つて、ミウミウ鐵の鏖が引きち切れてしまひます。兩軍、やんやミ賞めたゝえる中に、ちぎれた鏖を振り上げて、大音聲、鬼ミ呼ばれし畠山重忠はなきか、熊谷平山は居らざるか、出でよ出でよ呼び立てる景清の武者振りは、誠に胸のすくほミ勇ましい物語でございます。亡び行く平氏のために、萬丈の氣焰を吐くものミ言つて、よろしいかミ思ふのでございます。

それほぎの勇士でございましたので、頼朝は景清が生き残つて、自分をつけ狙つてゐるミわかるミ、安心が出来ない。それで、いろミ手廻して、景清の居所を探させますが、ミウミウ景清の馴染の遊女、阿古屋を責めて、景清の居所を白状させます。これは、お芝居で有名な、阿古屋琴責めでございます。もうこの森が、鏡山、山の上が生目神社でございます。

(四)皆様、すつミ左手を御覽戴きます。あの向うの岬を廻つて参りましたのでございます。誠にミ景色でございます。今日では、かうして立派な自動車道路が通じて居りまして、笑ひつ興じつ見物が出来るのでございますが、以前は先刻のあの内海から鶴戸神宮まで、山を越えては海岸に下り、又山を越えるミ言ふた具合でございました。かうして、ローマンスカーの遊覽バスで、面白くをかしく鶴戸詣りの出来ます今日ミは、全く雲泥の相違でございますが、昔は又昔で、格別の趣もあつたさうでございます。

ここに、新婚旅行としてこの鵜戸詣りは、七浦七峠の昔を語る、美しいロマンスでございます。宮崎地方では、結婚を致しますと、是非一度は鵜戸詣りをする習慣だつたさうでございます。あの人は、自分の嫁を、鵜戸詣りにも連れて行かぬと噂されることは、夫としての、大變な恥辱であつたに申します。それで、結婚を致すと、なるべく早く鵜戸詣りの新婚旅行を致します。尤も、新婚旅行に申ししても、何しろこの七浦七峠でございますから、新夫婦とも、草鞋脚絆に身を固めての徒歩<sup>か</sup>あるきでございますが、或は鶯の聲に耳をすまし、峠の松風に白帆を數へたり、或は桃の花咲く浦傳ひ、浮かるゝ蝴蝶に行く道を尋ねたり、手に手を取り合ひ、曳き合つての新婚旅行は、とても嬉しい思ひ出であつたさうでございます。

新夫婦が鵜戸詣りを致しますと、親族はその歸りを馬を曳いて途中まで出迎へます。そしてそこで花嫁には盛装をさせ、赤毛布を敷き、鈴を着けたしゃんく馬に乗せまして、花婿さんが手綱をさり、喜び迎へる親族達と一緒に、家路へきたるのでございますが、何と言ふ美しい、繪のやうなロマンスでございます。眼を開きますと、しゃんくくミ、馬の鈴が聞えるやうでございます。文明は、ロマンスを破壊するに申しますが、こんな美しい習慣は、どうかして、何時までも残しておきたかつたに存じます次第でございます。いよく、鵜戸神宮でございます。では御一緒に參拜致しませう。

⑥『別府温泉地獄巡り』 大橋遊覽バス

バス・ガール 佐藤 文子

皆様、お待ちごう様でございます。只今から、別府温泉地獄巡りの、楽しいドライブでございます。

右手の海は別府灣、波打際を掘ります、砂の下からお湯が湧き、そこへ體を横たへて、ほか／＼春の夢見つゝ、大海原から、寄せては返すいで湯の波を身に受けて、青空に舞ふ鷗を眺めながら、半日を暮す長閑けさは、忘れられぬ申します。

速見ヶ浦の一筋路、濱の真砂の白妙や、磯<sup>いそ</sup>剛松の常磐の色、興趣は盡きぬドライブも、こゝ龜川温泉より左に折れて、地獄巡りのコースへ入ります、いよ／＼血の池地獄でございます。こゝは眞赤なお湯の池、地獄の粘土で、若い娘が絞りの鹿の子、可愛い子供はハンケチで、日の丸の旗を染物遊びは、何と變つた情景ではございませんか。

次は坊主地獄でございます。ぶくり／＼煮える坩堝の泥地獄、この地獄には、その昔慾深坊主が居りました。貪慾因果の天罰からお寺の下が爆發して、お寺も、坊主も、諸共に地獄の底に落ちました。今では、正直婆さんが地獄の蒸氣を利用して、坊主饅頭をふか／＼ふかして居ります風情を、皆様如何御覽遊ばします。

又、その下は有名な海地獄でございます。畏くも今上陛下の東宮に在します御時、御臺臨あらせられました光榮の地獄でございます。

右に仰がれますは、一名を豊後富士とも申しまして、高さは四千五百尺、昔は盛に煙と焰を噴いて居りましたが、今は、靜かに眠る英雄を思はせる鶴見獄でございます。左の一廓は、たゞへ世界が何と申ししても我が帝國の生命線、赤い夕陽<sup>ゆうひ</sup>の滿洲の滿鐵療養所、こゝは櫻の名所でございます。

おひ／＼皆様もお別れの、お名残り惜い流れ川大通でございます。別府市は、三四十十年前まではほんの小さい漁師村でございましたが、別府村から別府町、市政を布かれてはや一三昔、世界一周觀光船も、毎年幾隻もなく入港し、國際觀光コースに加へられ、遊覽都市では世界一と稱せられて居ります。

皆様、これで一周十三哩約二時間の、楽しい地獄巡りはお済みになりました。私共は、謹んで皆様の御健康をお祈り申し上げます。

## 九州の民謡

各地に昔から傳はつてゐる美しいと言ふよりも尊いと言ひたいほどの民謡は、いくらかあります。しかし、かう言ふ、權威のある民謡は、音階や發聲法が違ふものですから、學校の唱歌から出發した今の若い人達には、さうもうまく歌へないやうです。かうして、おひくくに、封建時代の良いものが顧みられなくなり、その代りに、新時代のたゞ歌ひ易いものが、急に殖えて來るのです。旅に出て一番惱まされるのは、全く地方色のない何處で聽いても千遍一律の感じのする新民謡を強いられる事です。

各地にある唄のレコードの中で、福岡の「黒田武士」や「博多節」を裏表にした一枚なごは、優秀なものでせう。越<sup>え</sup>天<sup>てん</sup>樂<sup>らく</sup>今様の「黒田武士」は、傳統から言へば、唐の太宗時代に遡る雅量の旋律です。又「博多節」は正調博多節とも呼ばれるもので、所謂博多節を、芝派の哥澤に變曲したと思はれるほどの澁い凝つたものです。

バス・ガールの觀光説明の間に插まれる新民謡・新小唄・歌謠曲の中で、作曲も面白く歌ひ方もいゝと思はれるのは、右のテキストの中では、大阿蘇登山案内の「おらが大阿蘇男の胸よ」や言ふ男聲の唄や、雲仙登山案内の雲仙新小唄「普賢妙見國見を越えて」月の有明思ひに曇りやと言ふ女聲の唄や、二つ位のもんです。

次にこの雲仙新小唄を譜にして、その旋律を動かして、私達の巡歷の歌、『九州旅情』を歌ふ事にしませうか。

行こよ行かうよ、南の國へ、遠い思ひは、



雲仙新小唄



通ふ黒潮、夢枕。

博多人形、水たき料理、昔なつかし、  
槍の譽れは、黒田武士。

旅の乙女は、出島のあきで、描く幻影、  
紅い帆あげた、異國船。

胸にしみ入る、御堂の沈黙、榮光に輝く、  
サンタ・マリヤよ、わが聖女。

山で燃えるは、焰の躑躅、知らぬ思ひは、  
沖の不知火、夜燃える。

バスの乙女は、偉人を語る、時代を率ゐるし、  
人の力や、夢のあき。

バナナ・ピロウ樹、茂みの蔭の、いこふ乙女に、  
何を囁く、南風。

深い思ひは、縁たさきり、若い血も湧く、  
湯氣のまぼろし、湯の都。

逢ふて別れて、逢ふ島々は、しんさんころりき、  
滑り流れる、瀬戸の海。

旅でほごれて、結んできけて、九州なつかし、  
一つ心の、スズニール。